



私の天使

く め じゅんこ
【久米 淳子・愛知県】

「な～に、これ!!」。病棟に響く看護師の声。巨大なうんこが廊下に落ちていた。犯人は、明白だ。25歳の睾丸腫瘍末期の銀ちゃん(仮名)だ。時々彼は、廊下に脱糞する。銀ちゃんには、知的障害がある。父親は、口癖のように言う。「銀太が選んだ道。死んでも仕方ない」。私は、呪文のように繰り返される父親の言葉を聞きながら、やりきれなくなっていた。「知的障害のある銀ちゃんに治療の選択ができたのだろうか?」

彼のご両親は、看護師に銀ちゃん用のお小遣いを託し、面会にはほとんど来なかった。

銀ちゃんの全身状態が悪化した。私は、寂しがり屋の銀ちゃんを個室に移し、彼のご両親にお願いした。「もう時間がありません。どうか少しでも長く銀ちゃんと一緒に過ごしてあげてください」。銀ちゃんのご両親は、承諾してくれた。その時初めて知ったのだが、彼の母親は、先天的な障害で体が不自由だった。両親が付き添ってくれることを知り、銀ちゃんはとても喜んだ。「ありがとう。ありがとう。お母さん、ほんとにいいの? ごめんね。ごめんね。迷惑かけて。ありがとう」。お母さんは、ほほ笑みながら答えていた。「何ばかなこと言ってんの! 迷惑なんて、考えたことないよ」。私は、その時初めて気付いた。ご両親は、銀ちゃんの衰弱していく姿を見るのがつらくて面会に来られなかったんだって。

銀ちゃんは、天使だった。彼の最後の日は、確実に近づいていた。銀ちゃんは、どんなに苦しくてもつらくても「売店に連れて行って」と看護師たちに懇願した。売店に行くと、「このお弁当はお父さんが好きなの。このおすしはお母さんが好き。このお菓子はお姉ちゃんの子どもに買ってあげる」と言っては、買い物を繰り返した。自分はもう食べられないのに、自分の愛する人たちへのプレゼントを続けた。彼は愛する人たちに囲まれ、25歳の生涯を終えた。

私は、初めて天使に出会った。